

お人好しは好かれるのか



大阪公立大学現代システム科学域 准教授

河村悠太

2019年3月、京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士（教育学）。日本学術振興会特別研究員 DC1，日本学術振興会特別研究員 PD(神戸大学)，大阪府立大学現代システム科学域准教授を経て，2022年4月より現職。専門は社会心理学。主な著書として『利他行動の促進・抑制 評判への関心に基づく検討』（単著，ナカニシヤ出版，2022年）。

1. 人助けは一般的に肯定的に評価される

お年寄りに電車の座席を譲るとか，道が分からなくて困っている人を案内するといった日常場面の援助から，災害時の寄付・ボランティアに至るまで，他者のための行動は私たちの社会のあらゆる場面で観察される。本稿では心理学およびその近接領域の基礎研究の知見をもとに，人助けに対して人々がどのような評価を行うのかについて整理し，実社会の問題にどのような示唆を与えうるかについて議論する。

人助けを行う人は，一般的に他者から肯定的に評価されることが知られている。Hardy and Van Vugt (2006) は，公共財ゲームと呼ばれる実験課題を使ってそのことを示している。この研究では，8人の参加者が1グループとなって，金銭のやり取りを行った。実験課題の詳細は割愛するが，参加者は自分の利益を犠牲にほかのメンバーの利益を増やすことができるような状況だった。実験の結果，よりほかのメンバーの利益のために行動した人ほど，その集団の中での地位を高く評価される傾向にあった。また，より現実場面に即した研究として，Bereczkei et al. (2007) では，慈善団体に支援を行った人はそうでない人に比べて周りから好意的に評価されていた。

注意していただきたいこととして，これらの研究は，人助けをする人が他者からどう見られているか気にしている，あるいは好かれたくて人助けをしているといった見方を示して

いるものではなく、あくまで人助けの結果として周りから肯定的に評価されることを指摘している。ただし、人助けが良い評価につながるということは、良い評価を受けることを目指して人助けを行うという動機も働きうるということである。人は誰にも見られていないときよりも誰かから見られている場面の方がより他者のために振舞う (Bradley et al., 2018)。また、寄付をした人の名前をウェブサイト等で掲載するような試みは、実際の寄付を募る場面でも観察される。このように、人々は一般的に人助けをする人を肯定的に評価し、そのことは人助けを促す1つの要因にもなっている。

2. 人助けが好ましく評価されないとき

人助けをする人が周りから良い評価をされるという話を聞けば、「そんなことは当たり前じゃないか」と思われるかもしれない。しかし一方で別の研究は、人助けをする人が常に好かれるとは限らないことを指摘している。Parks and Stone (2010) は、Hardy and Van Vugt (2006) と似た実験課題を使って、自己利益を犠牲に他者の利益を増やそうとする人がどのように評価されるかを調べた。その結果として、極端に自己犠牲を省みず他者の利益を増やそうとする人はむしろ周りから好まれていなかった。

Parks and Stone (2010) は参加者に対して、他者奉仕的な人を好まなかった理由を尋ね、人助けをする人が好まれない原因について2つの可能性を提案している。1つは、自己利益を省みない極端な他者奉仕は、自他に公平に振舞うべきだという社会的規範から外れているから好かれないという説明である。もう1つとしては、極端に他者奉仕的な人の存在は、ほかの人の評価を相対的に毀損するからという解釈である。強引に具体例に落とし込むなら、1万円の寄付をしている人の中で10万円寄付した人がいると1万円の寄付が少ないかのように感じられるために高額な寄付者が好まれないという説明だといえる。Parks and Stone (2010) の実験は、極端な人助けを行う人が好まれないという話だったが、好かれないどころか周りから罰を受けるという研究すらある (例えば Herrmann et al., 2008)。善行が好かれないという結果はいささか直観に反するが、一方で高額な寄付が「偽善だ」と非難されるような状況を目にしたことはないだろうか。この実験はそのような現実場面を反映したものだと言える。

3. 日本は人助けを好まない社会なのか

善行が好まれないという現象は国や文化圏によって異なる可能性が指摘されている。例えば Herrmann et al. (2008) は、16の国や地域で Hardy and Van Vugt (2006) や Parks and Stone (2010) と同じような実験課題を実施したところ、まったく集団のために尽くさないメンバーは文化によらず罰を受けやすい一方、極端に他者奉仕的な人物が罰を受けるという傾向は国によって大きくばらついていたことが報告されている。彼らの研究は日本のデータを

含んでいなかったが、人助けを否定的に評価する傾向は特に日本で顕著かもしれない。Kawamura and Kusumi (2020) は、日本の参加者に対して他者のために振舞った人物に関するシナリオを呈示し、その人物の評価を依頼した。その人物の振舞いは3通りあり、具体的には、くじで手に入れた10,000円を①ほかの当選者に全額分ける(全額分配)、②ほかの当選者と5,000円ずつ平等に分ける(平等分配)、③すべて自分のものにする(総取り)であった。明らかに全額を分ける人の方が平等に分ける人に比べて他者利益に貢献している。しかし、全額を他人に分ける人物は、半分を分ける人物に比べて好意的に評価されていなかった。この背景には、日本ではほかの人の平均的なふるまいから外れた行動を取ることが肯定的に評価されないことがあるかもしれない。Kawamura and Kusumi (2020) は追加実験で、日米の参加者を対象として同様の検討を行っており、その際参加者に平等分配・全額分配のそれぞれをどの程度一般的に人が取りやすい行動ととらえているかを尋ねている。すると、日本でもアメリカでも全額分配は平等分配に比べて一般的でない(規範から逸脱した)行動として認識されていた。しかし、全額分配が平等分配ほど肯定的に評価されないという傾向は、日本でのみ観察された(図1)。

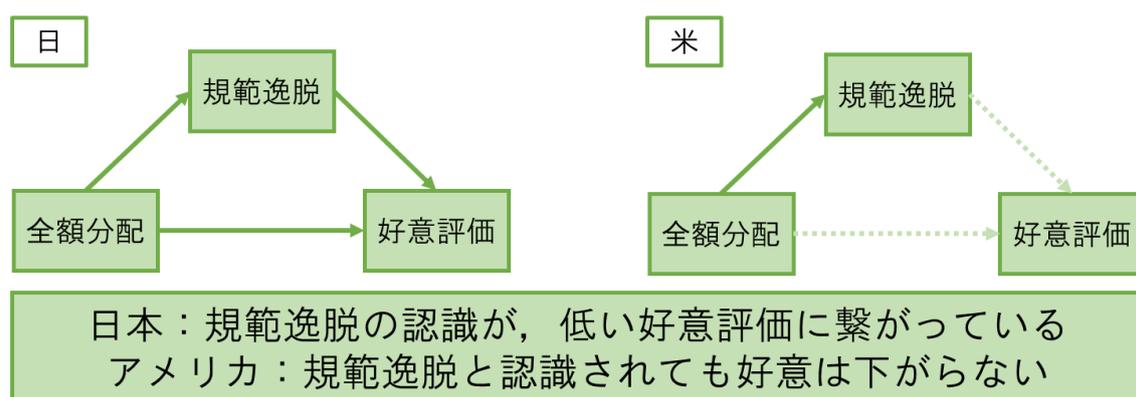


図1. より多くの分配に対する日米の評価の差異

日本で極端な人助けを示した研究は少なく、この研究のみから結論を下すことはできない。しかし、「出る杭は打たれる」ということわざにあるように、日本人々は極端な善行を取る人物を好まないという示唆は、多くの人の直観にも合致するように思われる。

4. 人助けの動機によっても評価は変わる

人助けが好意的に評価されないのは、周りの人の振舞いから外れている極端に他者奉仕的なときだけではない。人は行動の結果だけではなく、行為者がなぜその行動を取ったか、すなわち行為者の動機も踏まえて評価を行う。他者の人助けを評価する際も同様で、文化圏による違いは多少存在するものの、基本的には「困っている人を助きたい」という他者志向

的な動機ではなく、「見返りが欲しい」といった自己志向的な動機で行動した人は好意的に評価されにくい。興味深いのは、見返り欲しさに人助けを行った人は、まったく人助けを行わなかった人よりも否定的に評価されることである (Newman & Cain, 2014; Carlson & Zaki, 2018; Kawamura et al., in press)。ただし、見返りの種類によっても異なっており、感情的な見返り (例: 人助けをして良い気分になりたい) は物理的な見返り (例: 寄付をして税控除を受けたい) や社会的な見返り (例: 周りから褒められたい) と比べると肯定的に評価されやすい (Carlson & Zaki, 2018; Kawamura et al., in press)。

5. まとめ

ここまで、基礎研究の知見に基づいて、人助けは基本的には周りから好意的に評価される行動であること、一方で状況によっては好意的に評価されないことを述べてきた。本稿の最後に、これらの知見が現実の社会問題にどのような示唆を与えうるかについて考察したい。

第1節でも述べた通り、人助けが一般的に肯定的に評価されることを利用して、人助けがほかの人にも伝わるようにする取り組みは実社会の中でも観察される。人助けをした人を表彰する、寄付をした人の名前をウェブサイトに記載するといった試みはその1つであろう。これらは、人助けが常に肯定的に評価されるのであれば、人助けを促す試みとして機能するだろう。しかし、「極端に他者奉仕的な人はむしろ好まれない」という知見を踏まえると、個人名を公開するという方法は極端な人助け、例えば高額な寄付には効果的ではないかもしれない。実際、先行研究では、寄付をしたことを他者に知らせるかどうかが選択できる場合に、寄付額が極めて低い人だけでなく極めて高い人も匿名での寄付を行いやすかったという報告がある (Raihani, 2014)。また、周りから好かれるために人助けを行うことを良しとしない文化圏では、匿名状況の方が寄付を多く集めていたという研究もある (Lambarraa & Riener, 2015)。そして第3節でも述べた通り、極端に他者奉仕的な行動を好まないという傾向は日本で強いことを踏まえると、特に日本では、人助けの「見える化」がむしろ人助けを減らす可能性を考慮すべきかもしれない。これらの議論は基礎的な知見に基づいている部分が多いものの、文化特有の心理傾向を踏まえた施策の重要性を示唆している。

参考文献

- Berezkei, T., Birkas, B., & Kerekes, Z. (2007). Public charity offer as a proximate factor of evolved reputation-building strategy: An experimental analysis of a real-life situation. *Evolution and Human Behavior*, 28, 277-284.
- Bradley, A., Lawrence, C., & Ferguson, E. (2018). Does observability affect prosociality? *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences*, 285, 20180116.

- Carlson, R. W., & Zaki, J. (2018). Good deeds gone bad: Lay theories of altruism and selfishness. *Journal of Experimental Social Psychology, 75*, 36-40.
- Hardy, C. L., & Van Vugt, M. (2006). Nice guys finish first: The competitive altruism hypothesis. *Personality and Social Psychology Bulletin, 32*, 1402-1413.
- Herrmann, B., Thoni, C., & Gächter, S. (2008). Antisocial punishment across societies. *Science, 319*, 1362-1367.
- Kawamura, Y., & Kusumi, T. (2020). Altruism does not always lead to a good reputation: A normative explanation. *Journal of Experimental Social Psychology, 90*, 104021.
- Kawamura, Y., Sasaki, S., & Kusumi, T. (in press) Cultural Similarities and Differences in Lay Theories of Altruism: Replication of Carlson and Zaki (2018) in a Japanese Sample. *Asian Journal of Social Psychology*.
- Lambarraa, F., & Riener, G. (2015). On the norms of charitable giving in Islam: Two field experiments in Morocco. *Journal of Economic Behavior & Organization, 118*, 69-84.
- Newman, G. E., & Cain, D. M. (2014). Tainted altruism: When doing some good is evaluated as worse than doing no good at all. *Psychological Science, 25*, 648-655.
- Parks, C. D., & Stone, A. B. (2010). The desire to expel unselfish members from the group. *Journal of Personality and Social Psychology, 99*, 303-310.
- Raihani, N. J. (2014). Hidden altruism in a real-world setting. *Biology Letters, 10*, 20130884.